

下野新聞（明治四四年四月七日）

北海移民を送る

下都賀（しもつが）郡南部一町六箇村の水害で生活に困窮している人々は、今朝、小山駅を出発して北海道移住の旅についた。住慣れた墳墓の地を去り、親しき生まれ故郷を離れて一念起生、ここに困りきった挙句の活路を歩もうとする一行の心情を察すれば、誰が納得いくというものか。

離別することが非情であるとの思いは、いつの時代になっても人情である。しかし、私はこれら一団を見送るにあたって、この（国が関与するような）経緯には奥深いものがあると共に、このような悲しくいたましい気持ち呼び起こさせる一つひとつの事情に思い至らないことはできない。

移民と称した開拓という言葉の裏には、主に人口の再配分と不毛の土地を征服する（北海道を日本の領土と決め付ける）意味があると思え、移民奨励の声は、まず過剰人口の整理という特別な目的から始まったものである。

もつと厳格に言うならば海外出稼ぎと同じことである。一口に移民といってもその本質はある期間内の移住に過ぎないことで、本当の意味での移民といえるようなものではない。

このことから栃木県南部の水害地の移住民を見ると、どう考えても移住することを余儀なくされた背後の事情には腹立たしいものがある。

勿論、県南の渡良瀬川沿いの集落はどこも水害の危険性があり、年々水害が頻発する事態になっている。

中央政府が提案している沿岸四県におよぶ渡良瀬川改修工事は、住民の得失があることはさておき、改修工事が

完成すると、下流の利根川の改修工事とあわせて、県南部、渡良瀬川の流域の土地は当然復活することは間違いない。

すなわち近未来における治水対策の約束は土木技術の進歩がなせる業である。

このような10年ほど先の見通しを棄ててまで、一団を北海道に送らざるを得ないような事情には、単に移民団への同情以上のものがある。

更に意味深き同情を注がなければならぬのは、移民の一団は渡良瀬川改修工事に反対する住民ばかりだからである。

改めて言わずとも、今回の件はここに至りつくのである。

しかし、この事態を変えるようなことは、事情が事情であるだけに如何することもできない。七十一戸、二四〇余名の人数は少しも少ない人数ではない。

海の北からは冷たい風が吹きつけ、波が高く渦巻く場所、雪と戦い、氷を踏みながら未開の地を開拓することは、農耕の尊い独立を意味するものである。

下野の国は寒さが残るもの今は桜の花が咲く季節で花見客が訪れるのを待っている。

故郷の花に背を向けて住み慣れた地を去り、異郷の住民となる者の胸中には誰が理解できるであろうか。

しかしながら、花が咲いたり散ったりすることから、人の苦楽起りりまで誰も知る由もない。

北海の地寒しいといえども、異郷の地を見ることは楽しいものでもある。

目的地に行つて、一心に健闘せよ。汗の償（あたい）は、即ち富なり。